

# 京都でいちばん古い土器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



北白川廃寺下層出土の押形紋土器

山形紋と菱形紋を組み合わせた紋様構成をもち、全体の形が復元できる。

1990年末から91年春にかけて左京区北白川山田町において北白川廃寺の発掘調査が行なわれた。この調査では、北白川廃寺塔跡の北側を区切る施設、または塔の北に存在したと考えられる堂舎の発見が期待された。そして、みごとに塔北側の区画溝を検出し、北白川廃寺伽藍復元の貴重な資料となった。

しかし、おどろくべき発見がその次に控えていたのである。通常、発掘調査の終わりには、最終確認

の土層親察のために、断ち割りという作業を行なう。北白川廃寺の調査においても、当該地が北白川上終町遺跡のはずれにあたることから、縄文時代後期から晩期の遺跡の発見を期待して断ち割り作業を実施した。その結果、北白川廃寺遺構面から約1m下がった深さで、遺物包含層らしき黒色をした層を発見した。調査担当者は以降慎重に作業を進め、数点の土器小破片の出土をみたのである。

この土器は縄文時代早期に属す

る山形押型紋土器で、京都市内ではいまだ6箇所の遺跡での出土が確認されているにすぎない。しかも、その土器片が出土した土層をよく観察すると、黒い層が小判形に落ちこんでいる様子が認められ、当時の人々の生活の跡が残されている可能性があった。結局、調査の成果として縄文時代早期の竪穴住居跡や焼けた石などを入れた穴が発見され、また多くの土器が出土した。もちろんこの時期の竪穴住居跡の発見は、京都府内では初めてのことであり、近隣府県を見渡しても奈良県大川遺跡、三重県大鼻遺跡など数例にとどまっている。

縄文時代早期を特徴づける土器は、「撚糸紋土器」や「押型紋土器」である。撚糸紋土器は、撚糸を棒状のものに巻き付けて土器の表面にころがすか、押しつけて紋様としており関東地方を中心に分布する。押型紋土器は、東北地方と、中部地方から九州を中心にひろく分布する土器様式である。楕円形やジグザグの山形などの模様を、丸く細い棒に彫刻した道具を使い、土器の表面にころがして紋様を施している。

今回出土の土器は、瀬戸内地方に分布の中心を置く黄島式とよばれる土器型式に属する一群と考えられる。その年代は、放射性炭素



京都盆地最古の土器  
ネガティブな押型紋

### 放射性炭素年代測定法

遺跡から出土する植物の遺体に含まれる放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の量を測定して年代を知る方法。大気中には一定の割合で放射性炭素が存在している。動植物の体内でも、呼吸や食物の摂取などによって取り込まれるため同じ割合を保っているが、その個体が死ぬと供給が断たれてしまう。ところが、放射性炭素は物理的に不安定な物質で、約 5700 年で半分になる比率で崩壊し、量が減少するという特徴を持っている。したがって、動植物の遺体の放射性炭素の量から、現在までの経過年代を知ることができるのである。

年代測定法によると岡山県黄島貝塚の押型紋土器では約 8400 年前という結果がでている。

しかし、出土した土器をよく観察すると、これまで黄島式と呼ばれていた土器群に比べかなり異なった様相が認められたのである。出土した押型紋土器の紋様の主体となるのは山形押型紋で、楕円形押型紋は全体の約 3% にすぎず、山形紋と菱形紋、山形紋と平行線紋、山形紋と斜格子紋などの組み合わせの紋様が多いことが特徴としてあげられる。押型紋土器の変遷や縄文時代早期の地域差を考えると興味深い土器群といえる。

日本で最も古い土器は、長崎県にある泉福寺洞穴から発見された「豆粒紋土器」で、表面に粘土を豆粒のように貼りつけただけの丸

底の土器である。次に登場するのが「隆線紋土器」だ。土器の表面に数条の粘土ヒモをミミズ腫れのように貼りつけた、丸底または尖底の土器である。この「隆線紋土器」に続いては「爪型紋土器」・「多縄紋土器」と呼ばれる土器様式が続く。これらは、日本列島の最初の土器群であり、この時期を縄文時代草創期と呼んでいる。草創期の土器の年代は、泉福寺洞穴出土の豆粒紋土器で、約 12000 年前という結果が報告されている。

1980 年、中京区西ノ京南上合町の民家新築工事の際、縦 5 cm、横 8 cm の一片の土器を発見した。土器の表面が、楕円形押型紋とは凸凹が逆になったような紋様をする土器片であった。楕円形押型紋土器の器面に粘土を押しつけて紋様

を取ると凸凹が反転するが、このような押型紋を「ネガティブな押型紋」といい押型紋土器の中では最も古式に属する大川式といわれる土器であった。民家の工事中、立会調査により発見された 1 点の土器片は、現在京都盆地で 1 番古い縄文時代早期の土器だったのである。一日に数十件ある京都市内の土木工事、その一件一件を車で巡回する立会調査。発掘調査とは違った地道な調査により、京都の新たな歴史の発見があったのである。

草創期の遺構や土器は京都盆地ではいまだ確認されていない。しかし、先土器時代から縄文時代草創期にかけての有茎尖頭器などの石器は出土しており、草創期の土器も近い将来には発見されるだろう。(菅田 薫)



北白川廃寺下層出土の押型文土器 押型文土器のいろいろな紋様